

マンドリンクラブ

オーケストラのうちでもマンドリンオーケストラはユニークな存在である。主旋律、副旋律を弾くマンドリンを中心に、マンドラ、マンドリンリュート、マンドローネが低音部を支持つ。もう一つの重要な存在はマンドリンのワイフ役・ギターで、リズムを刻むと共に曲に変化を与えている。大規模になるとコントラバス、フルート、打楽器も加わる。これらのトレモロとギターの妙音が合致して絶妙のハーモニーと前欧的なムードを醸し出すのである。だが音域の狭さ、音量の小さいこと、早い曲には不向きなことなどの欠点もみのがせない。しかし我々は現代の喧噪と緊張への清涼剤として、またマスコミの低俗な音楽に対抗する意味でも活動を続けていく。

神大ではこんなものが発行されている



|| 学内発行物総ざらえ ||

その一

知られない所で知られない集いがささやかに開かれ、その活動の記録が機関誌となって、発行されている。それらを含め、神大内の発行物を総ざらえにしてみた。これらの活動に対する我々の認識と理解を深める為に。

神戸大学新聞 新聞

新聞会は新聞発行自体を目的とする組織という点で、その刊行物たる「神戸大学新聞」は、他のサークルの刊行物とは根本的に異なる。この点はそのまま神大新聞の責任の根拠となる。つまり、新聞会はその構成からいへば他の諸サークルと同様、一つの任意団体であるが、新聞は会員の同好紙ではありえないし、研究発表の場であってもいけない。この点について読者が実際発行された新聞からどういふふうな受け取り方をされ

神協

消費生活協同組合

ているかは一応別としても、会としてはこの原則をふみ外していないつもりである。右のような原則に立つ以上、当然問題となってくるのは、新聞がどの程度学生全体のものになっているかということである。この学生全体のものという内容がまた問題だが、古林前学長のいった「神戸大学新聞でありながら神戸大学のことがない」と。また読者からの批判としての「学生の新聞なのに学問についてとり上げることが少ない。」という声は、少なくとも会が解決しなければならぬ最低線だと考えている。読者からの厳しい批判、意見を期待している。

私たちの神大生協機関紙「神協」は三十三年一月創刊号以来、本年一月の第十号までその号を重ねています。組織部が担当していますが、生協の担い手である組合員と理事会の間に立ち、かつ各分校に分散して各職場で影の力となって働いている従業員との連携を計るために重要な働きをしています。殆んど組織活動の情宣で埋められて来ましたが、私たちの先輩は教育環境整備運動の一環として住吉支部食堂改築の大き

な問題にとり組みそれを実現させています。安くておいしい食事を組合員に提供す



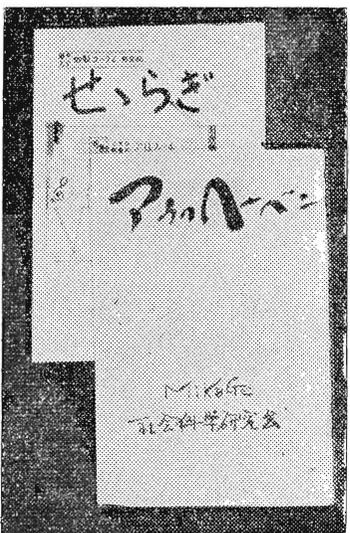
るためにアンケートの実施、微力な組織力を拡大し、より充実した生協にするために組合加入の呼びかけ、生協の原則たるべきセルフサービスの完全実施の呼びかけなど、背後には、独占資本から生協を守るための全国的な運動をひかえながら、身近かな問題解決という方法をとりつつ組合員、従業

員共に愛読して頂ける機関紙にしたいと努力しています。

アウフヘーベン

御影社会科学研究会

現代世界史の基本的な道すじは一九一七年ロシア革命に始まる資本主義から社会主義への移行ということである。このことは現実の歴史的發展の上で現在まで貫かれてきたし、今後も貫かれるであろう。このような流れの中にあつて社会科学を学ぶ意義はよりいっそう高く評価されねばならぬ。哲学から歴史、経済学を更にはその世界観を含む一大体系であるマルクス主義の正しい把握とそれを現実の日本の中で考えるマルクス主義の日本化に、少しでも近づこうとする。こそ、社研の主要な内容である。そのための一方法として会誌発行は企画され、昨年創刊号が出された。今後はその内容の充実と創造的發展を意図していきたい。ついでに「アウフヘーベン」という言葉にこそわれわれ社研の生命を見



せせらぎ

御影コーラス

三十二年九月創刊されて以来、現在第八集の発行途中にある「せせらぎ」は機関誌という事務的性格は余りなく、会員の自己主張としての役目が大きい。したがって内容はサークル活動、ひいては社会に対する青年の主張あり、恋愛論あり体験談ありで「その人を知る」という面で大きな役割をもっている。名前の「せせらぎ」であるがさらさらとやさしい音をたてながらも、山をけずり、やがては大河となって人間社会へと躍り出る。とこれは名前決定後、人に

ええかっこでいう時の説明である。実際の内容はごく幼稚な雑談や小さなちびこまった評論が大部分であるが、案外「せせらぎ」に通じるのかもしれないと書いていると周りでベチャクチャ会員がザワついてくる。これだ、せせらぎはさらさらと形容されているが実際はベチャクチャベチャベチャたえ間なく音を立てている。御影コーラスだってそうだ勝手気ままな集い——この現れがまさに機関誌「せせらぎ」である。

I.S.A. QUARTERLY

I.S.A.

I.S.A.は毎年国際学生会議などを催し世界の学生諸君との腹藏ない相互意見交換により誤解の辛皮を剥いで相互理解を深め、終局的には世界平和樹立への一翼を担おうと切望しているのである。そのI.S.A. Quarterlyは、かような会議のための一夜つけの勉強を回避し、平素から教養を高揚することを目的として発行される当クラブのささやかなる産物である。がしかしI.S.A.にとって欠くべからざるもの、それがこのQuarterlyな

のである。何故ならISAは単に外人をつかまえて、うれしげに英語を使うために存在するのでなく、真剣な態度で話し合うことを目的とするクラブであり、研究団体なのである。各国の代表との真剣な討議にもわれわれは知識を広くかつ深く、知識を完全に自分のものにしておかねばならない。そのために個人の力では到底だめだ。何人かの力を合わせる必要がある。各人の得たものをお互いに知らせ合ってい。このためにI.S.A. Quarterlyは役立つのだ。

フレイム

教育学部児童文化部

教育学部児童文化部の機関誌「フレイム」は昨年十二月に第十六号を発行した。姫路、御影両ジュニアから新入部員十三名を迎え、彼等の入部感想文を特集し、今後の部のあり方について、新しい方向がつけ加えられた感がある。昨年以來の創作活動も軌道に乗って来て、五本の童話的作品が発表された。



教 研

姫路分校教育問題研究会

われわれの教育問題研究会について少しばかり述べてみたいと思つ。ジュニアという特殊性をも考えて、あまり専門的に深めていくのではなく、浅く広くという目標で現在までやってきております。又教育学部生だけでなく、広く一般学生を対象としております。将来において、教師という職につかなくても、やがては子供の親となる人たちなのです。

教育に理解をもち、関心を持つ親になつてもらわねばならない。現在のところ、子

供の教育は学校にまかせておけばよいなどと考えている親の多いところでは、真の教育はできないと思う。あらゆる面において、親が教育者として子供に影響をあたえるのに大なるものがある。

「三つ子の魂百までも」といわれるごとく、幼児の教育が一番大切であり、それは親にまかされている。

真の教育について、現在親たちはどのようになっているか。又社会問題と教育の関係をとらえているか。例えば、勤務評定において、その真に意味するものが何であるかを理解せずに、安易に支配者のいうことを信じてその斗争に反対する等、くどいようであるが、将来親となって、子供を導いていくための手助けとなり、又いろいろな問題が起った時の指針となるように、このような目的をもって現在まで活動を続けてきております。現在までの活動は以下述べるようないです。

一期におきましては「戦後教育史の断面」(国土社)をテキストとして毎週レポータを決め、その人を中心として討議をおこなっていった。これによって何を待たか。歴

史の段階を追ってとらえることによって、現在教育上の問題となっている事を前後の事情もわかり、かなりくわしく把握することができた。現在あるところの親と教師の断層をうめていかねばならない。さもないとその間でなやむのは、将来の日本をになつたつ国民である子供たちなのだ。これらの問題を打開するために国民教育というものが生れてきた。

父母大衆の要求を満たすような教育。言葉の上では、簡単だが、いろいろと問題がある。一口にしていえば社会の矛盾を自覚させ、人間の基本的な欲求を満たしていくような社会を築く、人間をつくる教育。これは民主主義の心髄であると思う。綴方教育法もその一つの手段だと思ふ。日本独特の方法によって、子供たちを導いていくのではないか。大体以上のような結論に達した。

尚近畿教育系学生ゼミナール、全国教育系学生ゼミナールに参加し、広く全国の学生を考えというものを知り、講演会等により、われわれの今までの活動の反省と今後の指針を得たという事である。

っていた。戦後「山びこ学校」に感動した農村青年が「わたしたちも書く」と始めた生活記録運動から注目された「静かなる人間革命」の恩恵に少しでもあずかるうとして、わたしたちは書くことに踏み切った。サークル誕生以来十ヶ月である。

創刊号は夏休みの合宿前に作られ、これをテキストとして合宿に使った。実践記録を分析し、理論書を研究する中で、仲間と話し合い議論する中で、自分が得た教育実践の研究が、なかまのコラムが、生活記録が、サークルの歴史が、われらの先輩からの現場の声、その他がぎっしりと八十八ページの間に納められている。

何のためにこんな文集を作るのか。書く、と自身に大きな意義があるのだが、「とにかくしんどいなーこの労働も日本の教育実践前進のための捨て石ともなれば余は満足じゃ」(編集後記)が示めすがごとく、一人一人の意見を、一人一人の成果を文集にのせ、話し合い、たしかめ合い、みんなのものにすることによって、大げさに言えば日本の教育実践前進のためである。またわたしたちは「『腹がへつてもひもじゅうない』

と武士と千松の悲哀を経験しつつ切りまくる。大地の仲間よ!永遠に、共に新しき未来のために進まん」と文集を作る過程で、その「労働」を通して「仲間作り」を目ざしている。さらに、この文集を各大学の生活綴方サークルに送り、文集を交換し合い、相手のようすを知り、論議の場とすることが出来る。この春には合宿が行なわれ、活動のまとめとして機関誌第二号が生まれるはずである。

抵抗

文学部国文学科

昭和三十四年七月創刊、十月第二号、三十五年一月第三号と季刊を目標に歩んで来ている文学部国文学科の機関誌「抵抗」は、「前進的・良心的・積極的・希望的に行動することしからぬ若者としての、われわれの前進過程で内と外に生ずる抵抗を意味する」と一発刊のことは「その立脚点を明らかにしたように、研究面と創作面とから日本文学に参加しようというものなから生れた。詩や小説をも含むが評論が主体で、それは種々の研究会の不断の活動の上にその発表の場として「抵抗」が立つか

大地

教育学部教育実践研究会

わたしたちはそれまで、子どもに書かせることが頭にくっていた。生活綴方の方



実践記録や理論書を読んで、また仲間同士話し合っって書くことがどんなによいことかよく知っていたながら、自ら書くことを意

らで、例えば第三号が東京での第六回全日本学生文学ゼミナールに参加してのそれぞれの分科会からの報告に、その過半をさいていることなどもその謂れである。全てが



ムード化しがちななかにあつて、僕たちは僕たちの当面している問題に、ぶきつちようでもいい、真っ向から取り組んでいきたいと思つている。尚この本は五十円で、神戸の教職員や学生に買ってもらっている。

国文論叢

国語国文学会

神戸大学国語国文学会は、新制大学の発足と共に、国文学の教官を中心に結成され、文学部国文科・教育学部国語科の教官・卒業生・学生で構成している。「国文論叢」は本会の機関誌として、昭和二十八年に創刊され、現在第八号を編集集中である。事業として、毎年、市民を対象とする「夏期講座」を開講し、昨年で第八回を数えた。また、年二回、研究報告会を行っている。

発足当時は、研究会の報告者も機関誌の発表論文もほとんど教官でしめられていたが、創立十周年を迎えた現在、卒業生会員の活動が中心になってきつつある。しかし、まだ、発足当時の教官中心の運営が強く、残っており、卒業生会員の活動を十分に吸収しえていない。このことは、最近、会員各位から批判が出ており、組織的にも実質的にも、変質すべき時期にさしかかっている。

なんとといっても、本会はまだ若い集団なので、今後の発展は、会員の主体となる卒業生の活躍にかけられている。現在、機関

誌の発行は年一回であるが、年二回発行を望む声も出てきている。

神大文集

文学部自治会

「神大文集」は、毎年一回開学記念祭毎に文学部自治会が発行しているものです。内容は懸賞募集した小説、詩、評論となっています。毎年一回この時期に募集するということが決っていますので、それを目指して創作する人も増えて来たようです。誰に見せるともなく小説や詩を書いている人は案外沢山います。そういう人達に発表の場を与えたり、また、こういう人達に発表の場を作る事によって学内の創作活動を高めようというのが目的で行なわれていることです。勿論文学部以外の学生も応募できますし、現にたくさん集まっています。集まった原稿は専門の先生に審査してもらっている訳です。文学部自治会は今後も毎年このことを続けて行きますが、総合雑誌ができましたので、今年から発表は総合

雑誌で行ない、この雑誌は廃刊にすることをしました。

凌影

写真部

わが写真部は神戸大学の前身である神戸商大時代に田中薫経済学部教授を顧問として成立して以来、来年で二十六周年を迎える。先輩は一つに結合して凌影会というOBグループを形成し現役部員（われわれは学中の者をそう呼ぶのである）と密接に結びついている。

わが写真部は旧三商大展を始めとして、他校との交換交流が活発であり意見研究の



般若

神戸大学般若団

「パチン!!」又鳴った。つづけ様に警察が肩を打つ。慣れた者でも足の冷たさを感じれば忘れさせられる。新参者がふるえる不気味な音だ。が、心配は無用。案外痛くはなく、生命に別条は毫もない。しゃんとした我に帰らせてくれる。五十分を三回、つまり二時間半を毎晩、一週間続けて坐禅する十二月の接心の最後の晩の一コマだ。

此処宝珠山祥竜寺では二十名を越える神大生が黙々と地味だが厳しい修業に励んでいるのだ。やっとな鐘が鳴り、ほっとした面々、

わが写真部は月に一回撮影会を、月に二回例会を開いて、いろいろ研究を行なっているがその他に夏には合宿撮影旅行がある。わが部員は旅行が好きで昨年は東北へ行ったがこれらに関する現役部員の研究、旅行等があの五〇%をしめている。

わが写真部の雑誌凌影は五十代の現在東京で活躍の写真作家（先輩）のかたぐるしい、写真技術の話から十代の現役部員のうちとけた随筆にいたる、内容の広さを持っているのが大きな特色の一つである。（三十四年度版が少々残っておりますので希望者におゆずります。）

山と人

神戸大学山岳会山岳部

遭難者の追悼の傘、見られない部会誌「山と人」がわれわれの永年の願望でした。漸くそれが実現しました。今は亡き岳兄弟もわれわれのこの喜びにも増して、喝采を

送って呉れていることでしょう。既報の通り第二次日智合同のアンデス探検隊が出帆する等、号を追うにつれて大いなる飛躍がわれわれの部にも見られます。躍進の段階にあるわれわれ山岳部に最も必要なものは、過去の活動の反省を土台とした、アカデミックな地道な研究であり、人と山との再認識でありましょう。これ等の諸問題にじっくりと取り組み、現われた結果の集大成がわれわれの「山と人」四月号です。そこには、部内での発表にとどめておくべき物もあり、また先輩諸氏の間にもみ通用する物もあり、広く世の岳人に適用出来る問題もありましょう。が「山と人」が対内外関係を包括するものであってみれば、このような性格を備えることで、その使命を果している物と考えます。一瞥になる方々が、われわれのこれらの小さな努力を本号の中からいささかなりと見出して下されば、われわれの喜びは倍加いたします。

「山と人」編集後記より



足のしびれが一目でわかる奴がいる。はじめは苦しいが、少々慣れてくると坐らないと調子がおかしくなる位良いものだ。やがて和尚の話がある。日頃自分のことはかり考えて忘れがちな人生にとって大切至極な教訓がすべり出す。一回反省の念に打たれて聴き入る。ところが和尚、物には法則があると云わんがために、「柱は縦に、敷居は横に、雨の降る日は天気が悪い。兄貴やわしより年上だ。云々」の例の慣用語を口に出してしまった。一週間の修業を耐えぬいて自信が少々付き、自ら笑えてくるような心境になっていた団員、あちらこちらでくすくす笑い出して止まらない。おかしい理由を解しかねたらしい和尚、大喝一声雷を落すことに相成った。一同しんとした中に訓示が続けられ、冬の夜はしんと更けていった。数々ある般若団の活動の一場である。こういう活動を伝える機関誌として発行されている。

The Mikage E.S.S.S

目的1、英語を読み、書き話、せることは、「日本語」の世界以外に新しい「英語」の

世界を知り得ることであり、三つ共にあつてはじめて完成されるのである。この喜びは大きい。この点から見れば、われわれE.S.S.Sはただ話せるというだけではだめであるのだ。故に神大E.S.S.SはEnglish speaking societyではなく、English study societyなのである。

目的2、われわれの思想あるいは体でも心の中にあることを英語で表現する機会をより多く持つて、部員間の親睦を深める。

目的3、E.S.S.S以外の諸君に、われわれE.S.S.Sを紹介する。

成果、上に述べた目的にわれわれが少しでも近づけることが出来たので、大変良かったと思う。印刷技術がうまくなく、Missotypingが多かったのが残念である。

今後の計画、新入生を歓迎するため「The Mikage」vol. No.2を出版する予定であるが、これを通じて、新入生に神大をE.S.S.Sを知ってもらう。

青い実

児童文化研究会

「青い実」は、私たち児童文化研究会の

らっている。

創作においても、音楽劇、オペレッタ作曲、人形劇、劇、童話、童謡等があり、既に、上演されたものもある。十号までの間に、「青い実」特別号(三百余頁)が、発行され、好評を博した、その中には「たのしい音楽劇選集」(日本音楽劇協会編)に掲載された、「いちごよ赤、なれ」(鈴木正二郎作)もある。

編集、印刷、製本に到るまで、すべて学生の手で行われ、百五十頁を下ったことがない。実に、「青い実」を「赤い実」にしよとうとがんばっている。だから、常に、子供会を通じて、児童たちに読んでもらい、そのほんのうを聞き、児童と遊離した創作なり、研究にならないよう心がけている。

これが青い実のミットーである。

学生月報

児童文化研究会

「青い実」という研究雑誌とは、別に、毎月「学生月報」なる会員の声を反映する機関誌を発行している。これは、児童文化

は、もちろん、その他、人生論等、内容は豊富なものである。巡回や公演、子供会その他の一つの問題をとらえて、会員の考えを発表する事もある。

会員の熱意のあらわれか、原稿は、山ほどあつまり、毎月三〇頁〜六〇頁をくだらない。

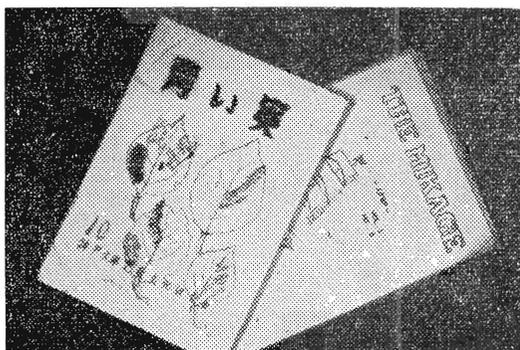
研究誌の持つたかたがないので、皆思うままに楽しんで書き、発行されると、すみからすみまで、残さず読んでしまい、毎月発行されるのが待ち遠しいくらいだ。

迎えて、四十号である。時には恋愛やサークル内の人間関係が問題となり、紙面に色をそえることもある。

目的は、会員間の意見の交流と反映にあるがこれにより、全学部にわたるいろいろな人間の考えを知ることが出来る意味で、大きな役割をはたしている。編集、印刷、製本すべて、学生が行っており、まさに会員の熱意の結晶といえよう。



研究と創作発表の場である。一年に一度は、必ず発行し、迎えて十号である。研究発表に於ては、児童の実態の調査研究、音楽、人形劇、劇、童話、幻灯等、理論的な面はもちろん技術面に到るまで、その分野は広い。学生の熱意のもとに出来るものであ



るから、どこへ出しても、恥しくない。全国津々浦々、児童文化関係、その他、放送新聞社、大学に到るまで、送り批評しても

サークルへお願い

この「学内発行物総ざらえ」は次にも続きます。ここに発表されておらず、しかもまだ発行委員会に知らせていない発行物があれば、三月十日までに発行委員会に届けて下さい。

(発行委員会)

Nantensho

新刊書籍
雑誌・地図
大学定教科書
検定教科書
謡曲稽古本

贈物には重宝を
当店の図書券を

六甲道駅前
南天荘
TEL8-5725